

山と博物館

第57巻 第10号 2012年10月25日

市立大町山岳博物館

博物館標本から読み解かれるもの

河合 久仁子

日本の哺乳類学の成り立ちの歴史は、国内の博物館の貴重な標本が天災や戦禍に巻き込まれて散失してしまったこともあり、検証されるべきことが山積みです。私は、国立科学博物館の研究者と共同で、日本の哺乳類学の黎明期と関連性が深いと考えられる明治から

第二次世界大戦終結前までに採集された国内外の博物館標本とそれに付随する資料を調査し、日本の哺乳類学の成り立ちを明らかにしようとしています。

日本では、博物館は「展示してある物を見てまわり、勉強するところ」という教育的側面に

対するイメージが一般的に定着しており、展示があまりないところが「良い」博物館であるという評価を受けています。一方で、研究機関としての機能も強く求められています。博物館で一般に公開展示されている標本は限られており、博物館の裏方には多くの標本や付随する資料が存在し保管されています。世界的に見れば、博物館の価値は裏方に収蔵されている「標本の数や質」で決まると言われ、研究に活用されています。また、標本に付随する資料が残されていけば、それらを読み解くことで収集された経緯や社会情勢や人的な動勢などの歴史的な背景も明らかにすることができそうです。

2010年から2011年まで、私はアメリカの首都にあるスミソニアン協会国立自然史博物館で研究する機会を得ました。博物館に収蔵されている標本のうち、明治期から昭和初期までに採集された日本産の哺乳類について調べたところ、1882年(明治15年)に、ある一人の外国人採集人によつて収集された標本とそれに付随した資料に出会い、詳しい調査を行ってきました。今回は、これまで明らかになつてきた彼と大町市の関わりについて紹介し、博物館の役割について考えます。

写真2: P.L.Jouy 肖像写真
SIA2010-1673 Smithsonian Institution Archives

(北海道大学北方生物園
フィールド科学センター研究員)

一人の採集人が遺したもの

アメリカ・スミソニアン協会国立自然史博物館と大町市のつながり

河合 久仁子

スミソニアン協会国立自然史博物館

スミソニアン協会は、計19の博物館、美術館、国立動物園からなり、世界最大の博物館群である。これらのほとんどが、アメリカの首都ワシントンDCのモールと呼ばれる広場を囲むようにして建っている。この協会は、1846年にイギリス人科学者ジェームズ・スミソンが「知識の向上と普及」のためにアメリカに寄贈した資金によって設立された。スミソニアン協会の博物館や動物園は国家予算と膨



写真1：スミソニアン協会国立自然史博物館
(河合久仁子撮影)

大な寄付によって運営されているため、基本的に無料で入場することができる。国立自然史博物館(National Museum of Natural History、以下NMNH)(写真1)には1億2600万点の標本が収蔵されている。

NMNHとタイプ標本

自然史博物館で最も大切にされている標本はタイプ標本(模式標本)と呼ばれる標本である。

NMNHも例外ではない。

では、タイプ標本とは何なのだろうか。新しく種を発見した際には、まずこれまで見つかった種との種とも違うことをはっきりとさせる必要がある。丹念に調べられる。たとえば人間の頭の大きさでも個体差があるように、生物にも年齢や性別による違いなど個体差がある。種内より大きな差異があつて、発見した種がこれまで知られている種とは違うことが確かめられたら、次に新種記載のための論文を書くこととなる。この論文の中で、新種の形の特徴、計測値、捕獲場所等が詳細に記載される。こうして記載論文が世の中に発表されることによって初めて、それが新種として世の中に認められることになる。これら一連の作業は国際命名規約という世界共通のルールに則って行われている。この記載論文のもととなり、

その種が新種であるための根拠となる標本をタイプ標本と呼び、この標本に基づいて種が記載され、後の研究に使われる、とても重要な標本なのである。

通常、タイプ標本は防火ロッカーの中に厳重に鍵をかけて保存され、誰でも触れることが出来る物ではない。また、収蔵しているタイプ標本の数や質はその博物館の誇りでもあり、博物館の価値を決めると言っても過言ではない。NMNHの哺乳類部門には59万点の標本と3200点以上のタイプ標本が保管されている。これは、世界一、二位を争う数だ。

NMNHにある日本産哺乳類標本

NMNHの哺乳類部門で保管されている日本の哺乳類標本は全部で1969点あり、海棲哺乳類を含む25科58属89種に及ぶうち2種は家畜である。この中には、4点のタイプ標本が含まれる。概算で日本産野生哺乳類の種の約58%の標本をこの博物館は所有しているということになる。この標本の採集年代は、日本の哺乳類学の成り立ちから考えて、大きく二つの時代に分けられる。一つは、明治時代、第二次世界大戦終結前であり、もう一つは戦後直後から現在までである。日本国における日本産哺乳類標本はタイプ標本を含む多くが、関東大震災や第二次世界大戦の戦禍で失われたとされる。このため、NMNHの哺乳類部門が保管する第二次世界大戦終結前の日本産哺乳類の標本は、日本の哺乳類学にとって大変貴重な物である。

明治期の日本産哺乳類標本、採集人P.L.Jouy

私は、このうち前半の時期(1882年から

1936年に収集された291点の標本について、誰がどのように採集し保管されるに至ったかに着目し、詳しく調べている。この中で明治期の標本のほとんどが1882年(明治15年)に採集されたもので、Pierre Louis Jouy(以下ジュイー、写真2)という一人の採集人によって集められたことが明らかとなった。ジュイーは、1856年ニューヨークに生まれ、1881年にアメリカ国立博物館(スミソニアン博物館の前身となる博物館)の標本採集のために中国と日本に派遣された。その後、韓国に渡り数年を過ごしたのち、健康状態が悪化したことにより帰国し、暖かいアリゾナ州南部に移住した。たびたびメキシコに標本採集に訪れたりしたが、1894年に亡くなった。

ジュイーによって採集されたこの博物館に収蔵されている日本産の哺乳類標本は36個体11科16属で、ホンドタヌキ、ニホンアナグマ、テン、ツキノワグマ(写真3)、ニホンザル、ニホンカモシカ(写真4、5)、ニホンリス、トガリネズミ類、コウモリ類などである。これらの多くは毛皮、骨または浸漬標本として保管されている。これらの標本の中には、トウホクノウサギ(*Lepus brachyurus angustidens*、ニホンノウサギの亜種とされる)のタイプ標本(写真6)や、2012年夏に絶滅種の指定があつたニホンカワウソ(写真7)も含まれている。標本のラベルやNMNHのデータベースから、多くの標本が「信州 大町」または「立山連峰」で捕獲されていたことがわかった。これら36個体の標本全てについて、ラベルや標本が納入されたときの標本台帳を詳しく調査し、他に付随した資料がないかを調べた。すると、動物部門のアーカイブスから、ジュイーのフィールドノートが見つかった(写真8)。



写真5: USNM013829
ニホンカモシカの頭骨
フィールドノートによれば
標高約2400mで捕獲された個体。



写真4: 収蔵されたカモシカの頭骨標本
引き出しの手前3つが立山産と
されるカモシカ標本。



写真3: ツキノワグマ (USNM 013821)
の毛皮
この他に頭骨も保管されている。

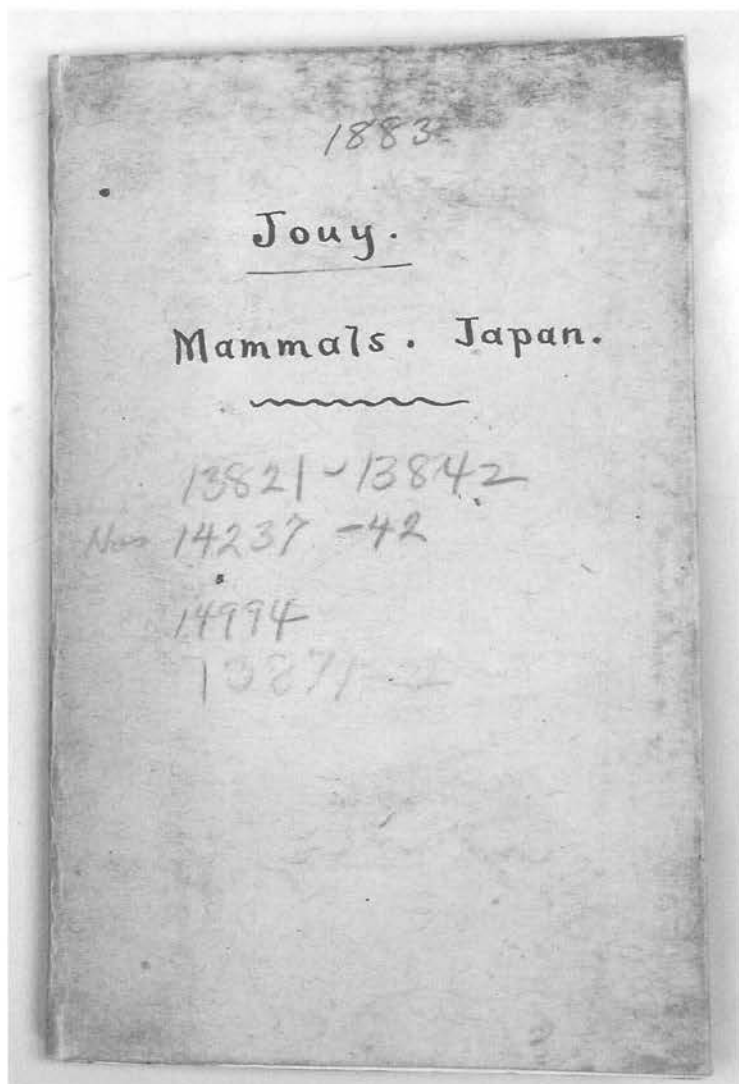


写真8: ジューイのフィールドノート表紙



写真6: トウホクノウサギタイプ標本 (USNM013871)
タイプ標本のラベルは赤色に統一されている。



写真7: ニホンカワウソの頭骨 (USNM 013842)
フィールドノートによれば大町近くの湖で
捕獲とのこと。アルファベットのタグが見える。

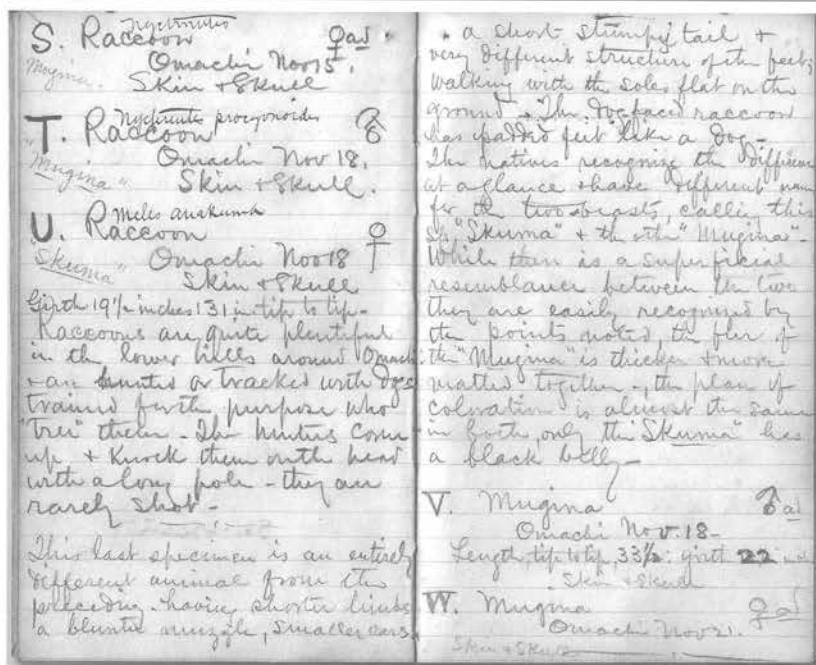


写真9: ジューイのフィールドノート Skuma、Mujina の文字が確認できる
Division of Mammals, NMNH, Smithsonian Institution 所蔵

ジューイのフィールドノート

フィールドノートから、ジューイは捕獲した個体にアルファベットを振って標本を整理していたことが分かった。改めて標本と照らし合わせる、彼が付けたと思われるアルファベットのタグが確認された。

フィールドノートを読み進めていくと、英名で「Raccoon」と記しているが、「Skuma」または「Mujina」として区別された標本があることがわかった。また、それぞれの動物の特徴が詳しく書かれたページも見つかった(写真9)。そして、前者にはニホンアナグマ(写真10)、後者にはホンダタヌキ(写真11)

の学名を後から書き込んだ形跡があった。実際に標本にあたり、間違いなくアナグマとタヌキが区別されて収蔵されていることがわかった。大町市史にはアナグマを「しくま」、タヌキを「むじな」と呼んでいたという記述があることから、日本人の猟師と行動をとるにしてこれらの情報を聞いていたのだろう。

ジューイの

鳥類標本

ジューイが採集した日本産の標本は哺乳類だけではなく、鳥類部門にも保管されている。ZMZエのデータベース上では、採集人がジューイで、採集場所が日本となっている標本は258点確認された。この中にはイサカ、サンコウチヨウ及びアカハラのタイプ標本が



写真10: USNM 13827 ニホンアナグマの頭骨
フィールドノートには Raccoon, Skuma と記されている。
Division of Mammals, NMNH, Smithsonian Institution 所蔵

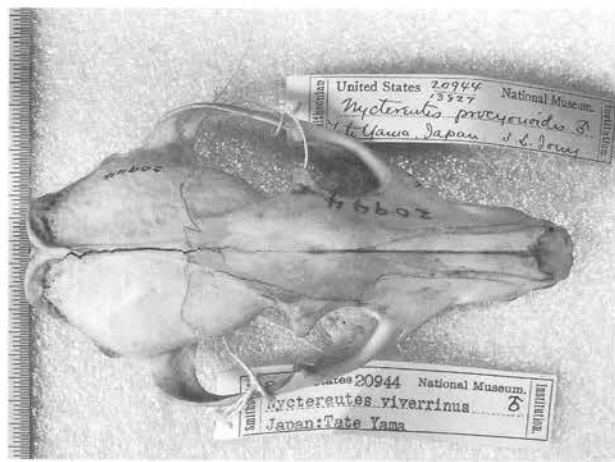


写真11: USNM013827 ホンダタヌキの頭骨標本
フィールドノートには大町で捕獲された Mujina と記されている。
Division of Mammals, NMNH, Smithsonian Institution 所蔵

含まれている。イサカのタイプ標本の採集地は「立山」となっており、他にも多くの鳥類が立山で捕獲され標本として保管されていることがわかった。

ジューイの足取り

1883年にアメリカ国立博物館の紀要に、「1882年6月から12月に日本で採集された標本における鳥類学に関する覚え書き」という論文が掲載されていて、ジューイの1882年の足取りが見える。この論文には、調査で捕獲された鳥類のリストのほかに、調査旅行の全容が簡単に紹介されている。これによれば、大きく3回の採集旅行を行っていたことがわかった。以下に、1882年の彼の足取りの部分を抜粋して紹介する。

① 箱根・富士山

6月23日 横浜を出発し、塔ノ沢で温泉に入る(移動は人力車と駕籠)
6月24日 芦の湯泊、雨が降り足止め
6月28日 富士登山口の須走着、移動は徒歩と人力車、7月の終わりで滞在し326標本(約60種の鳥類、果、卵など)を採集した。

② 日光中禅寺湖

8月22日 横浜を出発し、渡りの季節の鳥を捕獲するため日光へ向かい、キャンプをしながら捕獲を10日間試みる。気温が低く、予想よりも鳥類がいなかったため、移動を決定する。テントなどの不要な荷物や捕獲標本を横浜に送り、必要な物を長野県大町に送る。

③ 中禅寺湖・湯本・沼田・草津・善光寺・大町
中禅寺湖を出発し、湯本、沼田を通り、草津に抜け、善光寺に至った。

9月16日 善光寺では丸一日観光を楽しんだ。

9月18日 朝、善光寺を出発し、人力車と徒歩で夕方5時頃大町に到着した。この時、中禅寺湖から送った荷物はまだ到着しておらず、しばらくの足止めを余儀なくされた。

9月25日 大町から3マイルほど離れた「Onda」という猟師の村の茶屋の1室に宿を決め、ここで3ヶ月間の採集を行い鳥類標本約300点、哺乳類の標本、両生類及び魚類の標本を採集し、12月終わりに横浜に戻った。

大町市大出とジューイの記録

彼の記述から、彼は大町市近くに3ヶ月も滞在していたことがわかった。ところが、彼が滞在していたという「Onda」がどこにあったのか、長い間見当を付けられずにいた。そこで、思い切って大町を訪ねることにした。3ヶ月も外国人が明治期に滞在したのだから、地元には何らかの記録が残っているのではないかと期待し、市立大町山岳博物館を訪ねたのは今年(2012年)の5月の事である。この時、ジューイの足取りを少しでも辿ってみようと、善光寺を見学してから大町に入り葛温泉に宿泊した。旅行計画を立てる過程で葛温泉へと上がっていく道の近くに「大出」という地名があることを知り、これがジューイの滞在地ではないかと予想を立てていた。(写真12)

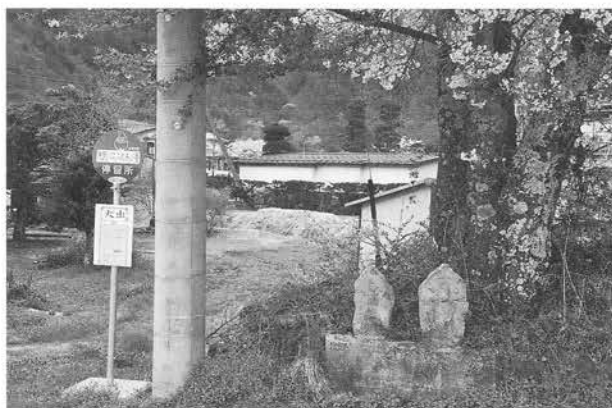


写真12: 現在の大町市大出地区

次の日に大町山岳博物館を訪ね、室員の清水隆寿氏に話を伺うことができた。ジューイが滞在した場所の候補地について尋ねると、「大出」に滞在した可能性が高いだろうとのことだった。現在も大出には狩猟をおこなう猟師が住んでおられるという。ところが、ここには茶屋があったという記録はなく、また博物館では明治時代に外国人が3ヶ月間も住んでいたということは把握していないとのことだった。明治期の外国人には立山登山ルートとして、大町から大出を通って針ノ木峠へ上がって行くルート(立山新道)が知られており、また、アーネスト・サトウの書いた「中部及び北部日本旅行案内」でも紹介されていたと、清水氏にヒントを頂いた。この本の第1版は1881(明治14)年に発行されている。ジューイがこの第1版を片手に採集旅行をしていたと考えるのが、自然であろう。ジューイが立山新道を通って登山を

し、その過程で山中の鳥類や哺乳類の標本を採集していた可能性が高い。

なぜ立山？ライチョウとジューイ

なぜジューイは大町にやって来て、立山にこだわって標本採集をおこなったのだろうか？実は、ライチョウの捕獲を目的にしていた可能性が高い、と私は考えている。サトウの本の序論には、「ライチョウは信州の山岳では珍しくない」と書かれている。また、トーマス・ブラキストン(イギリス人実業家であり、鳥類の分布上、津軽海峡が動物学的境界線であるという重要な発表をした人として知られる)は1882年2月に発行された論文の中で、日本の国立博物館が所蔵しているライチョウの標本について、「気になる存在であり、山を旅する人は留意して欲しい、信州の御嶽山で捕獲されたようだ」と書いている。

ジューイの1883年の論文には、「私たちはライチョウを獲得することを切望して立山に向かった」という記述がある。ジューイはサトウの本やブラキストンの情報から信州のライチョウのことを知り、ライチョウの捕獲を主な目的として大町、そして立山にやってきたのだろう。また、ライチョウに関して次の様な記述がある。「ライチョウは信州には沢山おり、立山連峰の一番高い頂でよく見られると言われている。しかし、私たちは捕獲することができなかった。これらの山々の頂付近ではこぼして岩だらけであり、沢山の亀裂があり、さらにハイマツに覆われている。これらがライチョウの隠れ家となり、彼らを捕まえるのが非常に難しかった。」

結局、ジューイはライチョウを捕獲すること

ができなかった。しかし、ブラキストンが持つライチョウの標本を精査し、その特徴を論文に記述し、これまで見てきたヨーロッパなどのライチョウとは違うようだと結論づけている。このときジューイが調べたとされる標本は、夏に信州で捕獲され、日本人のアライ氏よりブラキストンに寄贈された物だったという。

ライチョウのタイプ標本

ライチョウのタイプ標本は、ZMMNHに保管されている。おそらくジューイの記述をきっかけにして博物館側が標本を取り寄せたのだろう。このタイプ標本の捕獲地点は、データベース上ではMt. Minamiとなっており、またどのように博物館に収蔵されるに至ったかわからなかった。このため、今回ZMMNHの鳥類部門の標本管理スタッフC. Gebhard氏に問い合わせたところタイプ標本の写真(写真13)とラベルの写真、及び標本台帳の記録を送ってくれた。これによれば、この標本は御嶽山で1888年7月29日にキクチ氏によって捕獲された個体で、当時の東京帝国大学博物館より1891年に寄贈された物だった。ジューイは自らライチョウを捕獲することはなかったが、彼の記述のお陰か、スミソニアン博物館のA.H. Clarkeが1907年、旧大町から寄贈された標本をタイプ標本として、御嶽山のライチョウの新種記載をおこなった(現在日本個体は亜種 *Lagopus mutus japonicus* として扱われている)。

ジューイは博物館のアシスタントとして主に鳥類のコレクションを担当し、日本、中国、韓国、メキシコなどで標本採集をおこなった。彼の死後、彼の代筆者が日本と韓国のヒタキ類に

ついでに論文を書き、彼が日本や韓国で収集した標本を基に多くの種が記載されている。もしも彼がもっと長生きであったならば、彼自身の手によってライチョウや他の鳥類、哺乳類などの学名記載がなされたかもしれないし、また日本でももう少し名の知れた人であったのかもしれない。

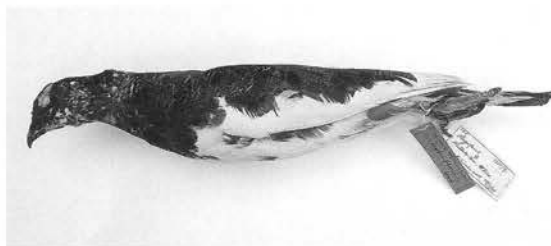


写真13: ニホンライチョウ (*Lagopus mutus japonicus*)
タイプ標本 (USNM 121179)

写真提供 Division of Birds, NMNH,
Smithsonian Institution



写真14: Jouy が持ち帰ったナタ
(E73087-0)

写真提: Department of Anthropology,
Smithsonian Institution
Photographer: Patricia Henkel

標本に付随する資料とその役割

調査を進めて行くうちに、フィールドノート
の他にさらに標本に関する資料が存在すること
がわかった。NMNHでは、同じ人物によっ
て同じ時に博物館に収められた標本に關してす
べての資料を保管する専門の部署がある。古い
資料は全てマイクロフィルムとして保管されて
いる。1883年にジュニーによって納められ
た標本群には13306という番号が与えら
れ、それに関わる資料が一括して管理されてい
た。資料の中に横浜から標本を送る際に付けた
手紙やその時送った標本リストなどがあつた。
リストには、鳥類、哺乳類、爬虫類及び魚類標
本の他に、立山で手に入れたとされるカモシカ
の毛皮でできた靴や手袋、ナイフ等も含まれて
いた。これらはスミソニアンの人類学部門に民
族学的資料として保管されている。今回人類学
部門で標本の管理をしている F. Pickering
氏と連絡を取り、カモシカの毛皮製手袋やナ
タなど何点かの写真を送っていたいた(写真
14)。機会があればこれらを手がかりに、大町
でのジュニーの痕跡を調べていきたいと考
えている。

博物館標本
は、標本自体が
持つ情報とその
標本が収蔵され
た背景に関わる
情報の二つが永
遠に良好な状態
で保存されるこ
とで初めて意味
を持つ。今回の
NMNHとの調
査を通じて、この

ことを痛感した。日本の博物館ではこのような
情報が保存されているという話をあまり聞か
ない。市立大町山岳博物館は山岳図書資料館を併
設し資料の収集や保管にも努めている。日本で
は大変貴重な博物館と言えるのではないだろ
うか。

最後に、標本を調査するにあたり便宜を
図っていただいたNMNHの K. M. Helgen
博士、野中愛氏、C. Gebhard 氏及び
F. Pickering 氏、研究のサポートをして
いただいた国立科学博物館の山田格博士及び川田
伸一郎博士、大町に残る資料や情報の提供をい
ただいた市立大町山岳博物館学芸員の清水隆寿
氏に御礼申し上げる。

主要参考文献

- Austin, O. L. Jr. (1948)
Japanese ornithology and
mammalogy during World War II (an
annotated bibliography).
General Headquarters, Supreme
Commander for the Allied Powers,
Natural Resources Section,
Report, 102:1-45.
- Blakiston, T. & Pryer, H. (1882)
Birds of Japan.
Trans. Asiatic Soc. Japan, 10:84-
186.
- Clark, A. H. (1907)
Eighteen new species and one new
genus of birds from eastern Asia
and the Aleutian Island.
Proc. US Nat. Mus., 32:467-475.

Jouy, P. L. (1883)

Ornithological note on collections
made in Japan from June to
December, 1882.
Proc. US Nat. Mus., 6:273-318.

金子之史・前田喜四雄(2002)

日本人の研究者による哺乳類の学名と模式標本
のリスト 哺乳類科学 42: 1-21

大町市史編纂委員会(1984)

大町市史 第五巻 民俗・観光 大町市

サトウ A. 編集、庄田元男編(1969)

明治日本旅行案内上巻カルチャー編 平凡社

サトウ A. 編集、庄田元男編(1969)

明治日本旅行案内中巻ルート編 [I] 平凡社

立山カルデラ砂防博物館(2009)

異人達が訪れた立山カルデラ

——立山新道と外国人登山——
立山カルデラ砂防博物館

(北海道大学北方生物園
フィールド科学センター研究員)

山と博物館 第57巻 第10号

発行 千 長野県大町市大町八〇五六一
市立大町山岳博物館

TEL 〇二六-1110111
FAX 〇二六-1111111
E-mail: smpak@city.omachi.nagano.jp
URL: http://www.city.omachi.nagano.jp/smpak/

印刷 奥村印刷
定価 年額 一、五〇〇円(送料含む)(切手不可)
郵便振替口座番号 〇〇四〇一七 一三三九三